

〔鸚鵡小町型付〕

△鸚鵡小町 位序々ノ序

夫、鸚鵡小町・関寺小町ハ、能も位も同事なれば、此藝之中ノ一大事にて、諸道に至りのなき太夫ハ努々なりがたき能也。委細は関寺に詳也。よく見合て鍛練有べし。

一 面、老女。覆鬢の上に姥髪。かづら帯、いかにも古きくすミたるよし。小袖も同位たるべし。唐織其外けつかうなる装束ハ努々不可用也。小袖ハつぼ折にても、或ハぬぎ掛にても吉。其時ハかり衣を上に着也。扇を前にさし、右につつえつく。

一 脇出立、大臣也。常のごとし。太刀持、上下着て、ゑゑぼし着、供に出る。

一 おき鞆にて脇出る。

脇出やうの事、真のおき鞆にて、三段打切て、笛ゆりを吹也。其時に出て、正面之正面を合、扱して柱こす共、必足をはやむべからず。舞臺の真中へゆうくと出て、左足より引、右足ふみすゆる。此時小鞆おとす也。則謡出ス。

一 おき鞆之事、初段、下、かんより打出す。二段、下、おつより打出す。三段、上、かしら一つより打出す。四段、上、しらむる頭より打出す。笛ゆる也。五段、中、頭二つより打出す。扱其次、かんより打出し、其次、おつより笛と同様に行、一度に留る也。

一 脇の謡ハ書略^ス。名乗過て常ノ脇座になをる。 〱笛ひしぎ、跡、真之音取吹也。 〱鞞も真の一
聲。但半越なり。

〱一聲にも亦五段の習あり。 〱越之前に頭一ツ 〱越ノ頭一ツ 〱しらめ頭一ツ、是を出頭と号。
扱太夫出て 〱やすミ頭一ツ。是より位猶静に打て、又 〱頭一ツ打事也。

一 〱太夫の出時分ハ、一聲打上たる跡に、地を又ゆうくと打て、又打切頭あり。其時に幕上さ
せ、奥よりほのくと静に出て、橋掛^り一間計あゆミ、 〱正面向立どまる。是を見て、^{〱爰の鼓のあひ}鞞又打
切、^{しらひ様 〱卒都婆小町に書記}やすミ頭を打也。太夫ハ杖を前につかえ、左りの手くびを右のつかえたる手くびの上に打
もたせて、息つぎをして、くたびれたる躰にやすミ、扱又あゆミ出て、舞臺まで出て、序所に
立て謡ひ出す也。

太夫
正面向、又つえ前に両の手かけつきて
身はひとり、我は誰をかまつ坂や、四の宮河原よつの辻、いつ又六の、ちまたならむ、 〱昔ハ芙
蓉の花たりし身なれ共、今ハれいでうの草となる、顔ばせハせうすいとおとろへ、はだへはとう
りのなしのごとし、杖^{そとつえを見るしかたもあり}つくならでハちからもなし、人を恨ミ身をかこち、ないつわらふつやすか
らねば、物狂と人はいふ、さりとてハ、捨ぬ命の身にそひて、くく、面影につくもがミ、か、ら
ざりせばか、らじと、昔^{爰にてなく事本也。然共初なきたる時ハ爰にて不^レ涕}をこふる忍びねの、夢ハねざめの長きよを、あきはてたりな我心、くく
〱是なるが小町にて有げに候、先々尋ふずるにて候、^{太夫を見て}いかに是なるハ小町にて有か ^{太夫} 〱見奉れ^{則脇を見る}

ば雲の上人にてましますが、小町と承候かや、何事にて候ぞ脇 扱此程はいづくを住家と定ける

ぞ太夫 誰留るとハなけれ共、唯関寺邊に日数を送り候脇 実々関寺ハさすがに都遠からで、閑居

にハ面白き在所なり太夫 前にハ牛馬の通ひ路有て脇 貴も行賤しきも過太夫 うしろつえにてうしろをおしへる仕舞も有にハれいけん

の山たかふして脇 しかも道もなく太夫 春ハ脇 春がすミ上同音 立出見れば深山邊の、此返しより正面へ出く、引とまり梢に

脇ハ本座になをるかゝる白雲ハ、花かと見えて面白や、はしが、りの姿を又見やり松風も匂ひ、枕に花散て、それとばかりに白雲の、色香お

もしろき気色かな、まハリざまに北へ向もよし北に出れば湖の、又少しどまり見やり志賀から崎の一袂ハ、身の類ひなる物を、ひがしを見て東に向へばあり

難や、石山の観世音、瀬田の長橋ハ狂人の、正面見てつれなき命の、脇を見るかゝるためし成べし

「石山の観世音」とおがミ、脇「瀬田の長橋」と足もとを見るなどハ、こまか過、狂言めき

て悪敷事二候。右の文句ハ、関寺に閑居をしめてハかゝる面白キ所ぞと、景氣を云たる計也。

あまりに物多ク候へば、小町老足の身として、一言の詞の下にかけ走たる理に成侍り。是、萬

事□つたハリ候。よくく鍛練可レ有義也。

太夫 かくて都の戀しき時ハ、柴の庵にしはしとゞむべき友もなければ、便りなしの杖にすがり、

都路に出て物をこふ、乞えぬ時ハ涙の脇を見るせき寺に帰候脇 いかにか小町、扱今も歌をよミ候べきか

太夫 我古へも、か仙洞のまじハリたりし時にこそ、ことによそへて哥をもよみしが、今ハ花す、

きのほに出そめて霜のかゝれる有様にて、脇を見る浮世にながらふるばかりにて候脇 実尤道理なり、御

門より御あはれみの御哥を下されて候、脇短冊とり出す是々見候へ太夫何と御門より御憐みの御哥を下されて

候とや、少さし寄てつくばふあら有難や候、つえは右の脇に置て右の膝にておさへ敷物也老眼にて文字もさだかに見えわかず候程に、それにてあそばされ候へ

脇さらばそれにて聞候へ脇少正面むきて短冊上太夫いかにもたからかにあそばされ候へ脇きく雲の上は太夫雲の上は脇雲

の上は、有し昔にかはらねど、見し玉だれの内や床しき太夫あら面白の御哥や候、悲しやなふ

(る)かき流れをくみて、水上をたゞすへとすれど、哥よむべし共思はれず、又申さぬ時ハ恐也、所

詮此返哥を一字にて申さう脇不思議の事を申者かな、夫歌ハ三十一字をつらねてだに、心のた

らぬ哥も有に、一字の返哥と申事、是も狂氣のゆへやらむ太夫いやぞと云字こそ返哥なれ脇ぞ

と云文字とハ扱いか太夫さらば御門の御哥を詠吟せさせ給ふべし脇ふしんながらもさし上で、

雲の上は、有し昔にかはらねど、見し玉だれの内や床しき太夫さればこそ内や床しきを引かへて、

内ぞ床しきとよむ時ハ、脇小町がよミたる返哥也脇扱古へもかゝるためしの有哉らん太夫なふ鸚

鵒返しと云事は地此哥の様を申也、正面向御門の御哥を、ばひまいらせてよむ時ハ、天のおそれもい

かならむ、和歌の道ならば、正面をおがむ神もゆるしおはしませ、貴からずして、高位にまじハると云事、脇唯

和哥の徳とかや、見るく同音夫哥の様を尋るに、長哥短哥せんどうか、おりくはいかいこんぼん

か鸚鵒返し、廻文哥也太夫なかんづく鸚鵒返しと云事、もろこしにひとつの鳥あり地其名を鸚

鵒と云へり、人の云言葉を受て、則おのがさへづりとす太夫何ぞといへば何ぞとこたふ地鸚鵒

の鳥のごとくに、哥の返哥もかくのごとくなれば、爰にて脇を見るあふむ返しとは申也観世にハ曲舞ニかゝる時脇を見る。萬の能かくのごとし。是則ニ座の替りの定る法也

同音 述懐の心を含、謡はやす事肝要也実や哥の様、語に付へて古への、猶思ハるゝはかなさよ、幽玄の心を含さればこしかたの、代々の集の

哥人の、其おほくある中に、今の小町ハ、たへなる花の色このミ、哥の様さへおふなにて、唯よ

わくくと讀とこそ、脇にあひしらひ、脇も太夫を見家々の、書傳にもしるし置給へり太夫和歌のりくぎを尋しにも地小町が哥

をこそ、唯こと哥のためしに、ひくのミか我ながら、恋慕の心を含、謡はやす美人の形も世にすぐれ、よてうの花とつく

られ、桃花雨をおび、りうはつ風にたをやか也、ししゆむ猶うごきほこり、利花ハなのミ成しか

ど、述懐にて又終。太夫ハ少うつぶきたるがよし今せうすいとおちぶれて、脇太夫を見る心躰ひじゆつする、小町ぞ哀なりける

〜此曲舞ハ幽玄の文句おほければ、いさめる心有に依て、謡、はやし物も〜関寺よりハ少かる

きたよりあり。

脇〜いかに小町、業平玉津嶋にての法楽の舞をまなび候へ太夫何と業平玉津嶋にての法楽の舞を

まなべと候や脇中々太夫〜扱も業平玉津島に参り給ふと聞えしかば、つえとり、両手にてつかえ立て我もおなじく参らんと、

都をばまだ夜をこめていなり山、くずはの里も浦近く、和哥吹上にさしかゝり

△はやし物に上手なくて能をかるくする時ハ、爰にて物ぎあり。立て右へ行、居座へ入て、小

袖ぬぎかけ、長けん着し、金の風折をきる。又〜爰にて物ぎ無レ之時ハ、老女の男博士ノ舞

なるゆへに、〜関寺よりも心入大事にて候。

太夫 又序所へ出てうたふ。扇持
 玉津嶋に参りつ、
 地 太夫しづかに出る
 玉津嶋に参りつ、業平の舞の袖、思ひめぐらす忍ぶずり、とくさ色の
 狩衣に、大もんの、
 左手にて左りの前を少とる 扇右へ上
 袴のそばをとり、風折ゑぼしめされつ、和光の光り玉津嶋、めぐらす袖や、
 足拍子にて乗込引で、則右へ小廻りして序をふみ出す
 浪がへり
 爰にて
 △序之舞、かんの掛りにて、蘇合五段也。
 △角之拍子、三足半も則書記。

一 へかんの掛りハ、へ定家に雖レ有レ之、序ノおろしへ六同にて、相違致候間、又爰に具記者也。

△かんのかゝりぞと云約束の笛の序。然る間、常の舞にハ此序に無^ニ吹出事^一。

● 中 ぼひやあ 上 らあ りんやらあ りやあら

下 ひようゐ ● 中 ひやあるり 上 しい ● 中 ひゐういやあ

● 中 ぼひやあ 上 らあ ひゐ 下 ひうい ● 中 ひういやあ

下 らゝろい ● 中 常のおろし也 上 ぼひようらありうろう ●

中 是を序ノ序ト号 上 上 右足下
 ひようらあ 上 同合^ル 上 同 角ノ拍子也 ● 左足 ● 左足 ● 右足

○ ひう 引持 上 同合^ル 上 同 角ノ拍子也 ● 左足 ● 左足 ● 右足
 やあ 引持 上 同 引 ● ひやあ 中 拍子^ニ
 ● 左足拍子^ニ ● 左足拍子^ニ

上 ひうやあ 是より常の舞也
 ● 左足拍子^ニ ひうろろういひやるり
 爰にて半足左足すり出すに依テ三足半ト号

一 へ扱、五段へ蘇合之習ハ、へ関寺に委細に記侍り。然間、爰にハ書略ス。へ説ニ云、長絹を着たる舞にへつまむ扇ハ古来より嫌フ。此鸚鵡に長絹を着し侍らばへ蘇合成がたかるべし、と云へり。春日太夫彦三郎云、鸚鵡ハ又常の能とハ替大事の能なれば、へ蘇合にて無レ之時ハ大事也^(之)せん

し。殊に白拍子ノ類の小町なれば、扇つまむもくるしからず。可レ舞と云へり。

太夫 上常のごとく 和哥の浦に、しほミちくれば、かたを浪 地和哥の足ニ左りへ行 田鶴啼わたる、●右足 打込引 なき渡る

太夫 爰より位静に誦舞はやす也 たつ名もよしなや、忍び音の 地 身をかへ正面へ出る たつ名もよしなや、忍び音の、月にはめでじ ●左足 大夫 静に右へ廻 是ぞ此

地 つもれば人の 大夫 扇た、ミ前に指、居座分杖とり持 老と成ものを 地 か程にはやき、 光りの陰の、時人をまたぬ、習ひとは白

浪の、杖にて舞臺をつき 昔やな 左手にてなきとす かくて此日も、暮行まゝに、脇立て正面の方へ向 さらばといひて、行家都に、帰りけ

れば 大夫 又位をしづむる 小町も今は、脇を見やり 是までなりと 地 つえを両手にてつ□え立躰肝要也。足を跡へよろくとする也 立別、廻り序所へ行 行袖の涙、立わか

れ行袖のなミだも関寺の、柴の庵に、常の所にて見とめ入 帰りけり

右今春家而無レ之能而候故、斟酌候へ共、依二御執心一八木権頭秘密相傳之趣一点不レ浅令二傳受一候。聊他見有間敷候。否。

年号月日 幸孫六判

右自筆自判之書物を以テ写レ之進之候。于レ余替仕舞於レ有レ是者可レ為二似事一者也。

寛文五乙巳曆 秋扇翁

二月下旬 照三(朱印影模写)(花押)

松井与兵衛殿 参